

「わが留学の日々」

1980年度留学生 谷口尚之(奈良教育大学附属中学校)

ネッカー河と Alte Brücke の向こうの木立の中に、旧市街を見下ろすように立つ Schloss。一幅の名画を思わせる Heidelberg の写真を目にすると、30年近くも前の青春の日々が今も脳裏に蘇ります。私が留学したのは1980年～81年。世界はまだ冷戦の時代であり、ドイツも東西に分かれ、その象徴とも言える「ベルリンの壁」が一つの民族を分断していました。そのため、日本からヨーロッパへはアラスカ経由で北極を越えていくコースが最短の航空路でした。海外渡航どころか、飛行機というものに乗ったことの無かった私には、17時間余りの空の旅からして、目にするすべてのものが新鮮で興味津々でした。

ドイツでの最初の二ヶ月は観光地で知られる Rothenburg での語学研修でした。おとぎ話に出てくるような可愛らしい街と、語学学校で知り合った様々な国の仲間との出会いは留学生活に対する私の不安を払拭してくれました。

秋になって Heidelberg 大学に移りましたが、当時はまだ相互の交換留学制度もなく、日本の小さな大学からの留学生のことも認知されている様子ではなく、用意されているはずの学生寮も「知らない」と言われる始末でした。未熟な語学力で書類を片手に必死に説明してようやく学生寮の二人部屋を確保できてほっとしたのをよく覚えています。当時はトルコ系の Gastarbeiter が社会問題化していて、日本からの留学生も滞在許可をもらうのに、証明書を手に長い時間並ばされました。

冬になって大学の掲示板に留学生向け「ベルリンツアー」の案内が張り出されました。またとない機会であり、しかも約1週間で60マルクという廉価にもひかれ参加しました。厳冬のベルリンに向かうバス旅行でした。今思い返せば、共産政権の経済政策が破綻していることを在西ドイツの留学生に知らしめるためのプロパガンダの一環だったのでしょうが、その旅で目にし、体験したことは私の留学生活のなかでも忘れられないものとなりました。複雑で緊張した国際情勢の縮図がそこにあり、同じ街に住む同じドイツ民族が、壁一つを隔てて全く異なる暮らしぶりをしていく現実がそこにありました。立ち入るところか、写真一枚撮ることも禁止で、バスの窓越しに怖々シャッターを切った手ぶれのブランデルブルク門の写真と、そこを笑顔で行き交う今日の映像を見比べ、あの時予想もしえなかったその後の世界情勢の大きな変化に隔世の感を禁じ得ません。

今こうして自身の青春の日々を思い返せば、この留学で経験したことが私のその後の教員生活に大きな影響を与えたように思います。教科の授業や学級活動の場でそうした体験を話してきた結果かどうか、私の教え子で海外留学を目指した者も多く、先日も外交官になって在フランス日本大使館に勤務することになったと報告に来た卒業生もおりました。現在、附属中学校は大学同様にユネスコスクールに加盟し、持続可能な未来を実現するための教育を進める一員として活動を始めています。私も一昨年はニュージーランドへ、今年是中国へと研修や視察に行く機会をいただいたり、つい先日までユネスコの青少年交流ワークショップを行い、インドネシア

と日本各地の中高校生による交流活動を実施してきました。今、立ち止まって、そうした国際理解教育や異文化理解教育あるいはESD(持続可能な開発のための教育)に自分がなぜ携わっているのかと考えてみれば、やはり大学生時代の留学経験にその原点はあるように思います。

わずか1年足らずの留学でしたが、思い出を綴るときりがありません。何物をも吸収し、その後の人生の糧とできる青年期に、こうした貴重な機会を与えてくださった関係各位に心から感謝するとともに、貧相な私のドイツ語力を心配して直前までドイツ語の Mittagessen の会を持ってくださった竹原先生に改めて御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。